

文様染の系譜 (5)

日本の鎖国政策が終息し、世界に目を向けると、産業革命の洗礼を未だ、受けてない日本国と日本人は、工場生産による工業製品に瞠目した。明治政府は衣料の欧米化を促進すべく、繊維産業を指導した。政府は数回に及ぶ内国勸業博覧会を東京、京都、大阪等で開催し、日本独自の伝統産業と、海外の新商品を国民に知らしめた。

今まで閉じられていた消費者の目が、とりわけ引き付けられたのは、繊維製品では外国出品のウールのモスリンとプリントの綿ネルであった。ウールは羊がわが国には生存しなかったため、日本人にとって初めて手にする、珍しい素材で、絹よりも安く、新たに出現した合成染料の発色が美しかった。モスリンに合成染料で友禅文様を染め出したモスリン友禅は消費者を魅了し、モスリンの輸入数量は急激に増加した。一方捺染綿ネルは政府の繊維産業の近代化政策の思惑と資産家の投資意欲が一致し、直ちに起業化する運びとなった。その為紡績・製糸・織布・精練・染色・起毛等の関連工場が操業を始め、ローラー捺染機の1号機がわが国で始動したのは、明治31年(1898)のことである☆i。

我が国はこれまで、三度やむなく文様染の転換を行った。

第一回目：遣唐使が廃止され、蜜蠟の輸入が止まり、藤纈染が出来なくなった時(平安時代)。

第二回目：公家を抑え、武家が台頭し、文様染が見直された時(室町時代)。

第三回目：消費動向が武家から商人に移り、綿織物を国内で量産するようになった時(江戸時代)。

第四回目の転換期は、産業革命の申し子のようなローラー捺染機がわが国で捺染を開始した時である。

この頃から我が国の文様染の系譜は、和装品と洋装品の二つに枝分かれする。その後新しい繊維加工、新しい繊維素材、新しい加工機械、これには文様染の機械も含まれる、新しい染料が開発され、二つの系譜は遅い速いはあったものの、夫々それなりに、同じことを体験し、同じように進化して現在に及んでいる。しかし、和装品は民族衣装の沈滞、洋装品は製造拠点の海外移転という大問題を抱えることになった。これが新たな転換期になる可能性が出てきたが、即断は許されない。

話を明治期に戻すと、海外からもたらされるおびただしい情報の中で、文様染めの一手段として、ローラー捺染機を駆使することによる、文様染めの量産、大衆化は非常に魅力のあるトピックであった。こうした中で、初めて捺染機を輸入し、使用したのは京都の堀川新三郎氏であって、自ら英国に渡航し、片面6色1台を購入して帰り、モスリン及び綿ネルの捺染を開始したのは明治31年4月2日のことである。

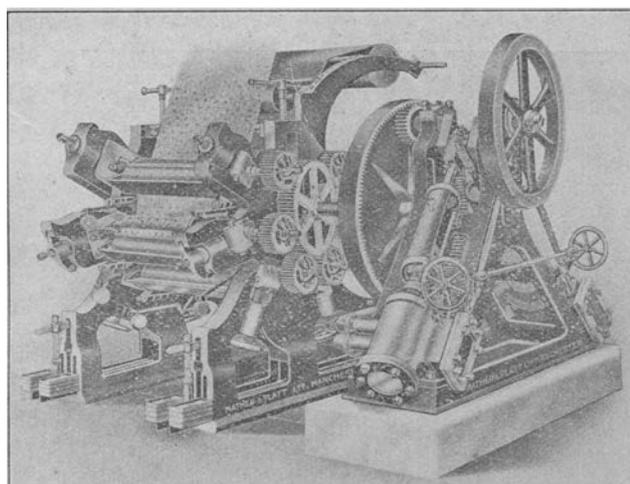


図-1 英国マザー&プラット製 6色片面捺染機
蒸気タービンを動力源とする明治期の捺染機
西田博太郎著 近世染色法 捺染編

	設置者	国別	製作者	機種
明治31	堀川新三郎	英国	ジョンウッド	広幅6色
明治32	五二会綿ネル	仏国	アルサス	2色両面
明治32	千草安兵衛	英国		広幅6色片面
明治33	吉川喜作	英国		2色片面
明治33	紀州綿布精工	英国		4色両面

表 1

明石厚明日本機械捺染史

その後表1の如く堀川工場を含む、5工場が相前後してローラー捺染機をイギリス又はフランスから購入し、綿ネルの捺染を開始した。何れも我が国機械捺染創業時代の企業であって、機械器具の類は勿論、彫刻ローラーとそれを製造するための道具類に至るまで、尽く海外より輸入に頼らなくてはならず、よくその困難を克服して、捺染技士、調液技士、ローラー彫刻技士等の養成に努め、遂にはそれらを自給自足し、輸入に頼る必要のないレベルに至るまで向上させた努力は、高く評価されるべきである。

かくして綿ネル全盛時代が到来する。是が文様染の第4の転換期である。

此の頃、和歌山では高橋亀太郎が明治35年(1902)岡崎愛之助製作の国産第1号、2色ローラー捺染機を設置し、好成績を収めたので、同地の才村新四郎、小池栄三等が相次いで同機を設置し、綿ネル捺染を始めた。これに刺激され、当時同地では雄型捺染が盛んに行われていたが、これらの業者は順次ローラー捺染に転換して、産地を形成した☆ⁱⁱ。



図-2 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-151-1-50-2 第5回内国博出展 京都市 京都綿ネル(株) 綿ネル捺染

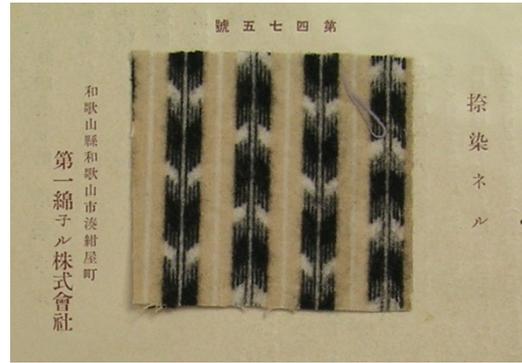


図-3 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-151-1-238-1 第5回内国博出展 和歌山市 第一綿ネル(株) 綿ネル捺染



図-4 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-55-1-4 明治期 ヨーロッパの捺染綿ネル

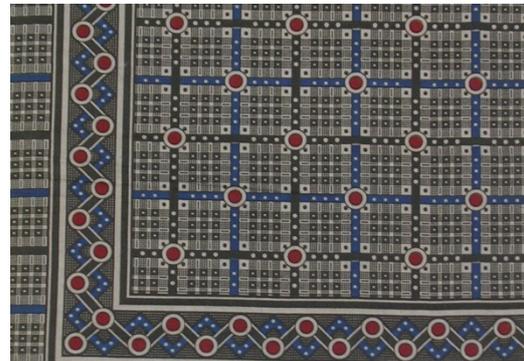


図-5 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-28-4-24 明治期 ヨーロッパのローラー捺染 綿スカーフ

ローラー捺染機の国産化に成功した岡崎愛之助は、和歌山鉄工株式会社を創業し、捺染機をはじめ、種々の染色機械を製造し、世界的に有名な染色機械メーカーに成長したが、先年百余年の栄光の歴史を閉じた。此の頃京都で綿ネルの一貫生産を目的として設立された、五二会綿ネル株式会社は、近代産業として、綿ネルの量産体制を確立し、社名を日本製布株式会社と改め、更紗の生産技術の開発に力を注いだ。

一方の雄堀川新三郎は京都の東部、蹴上に新装成った発電所の近くに工場を持ち、綿ネルより先にモスリン友禅を手掛け、大阪の岡嶋千代造等と共に友禅の染法の近代化に努めた。その最たるものは、堀川新三郎が神戸のドイツ人ショーライス商会と特約して、亜鉛末を輸入し、これと石灰を糊に混ぜ、防染糊を開発した、これを末糊と言う。また植物染料の抽出液と媒染剤を混ぜ合わせ、これに糊

を混ぜて増粘して、色々な色糊を作り、これに先の末糊を併用し、最後に蒸熱により、染料を固着し、モスリン友禅を始めた。此の色糊を写し糊と言ひ、この染め方を写し染めと言うが、明治 12 年（1879）に写し染めが完成したと、京都近代染色技術発達史に記されている☆ iii。

この時は未だ、天然染料を用いていたが、間もなく輸入合成染料が用いられるようになり、彩は一挙に華やかさを増す。これが国民の間で評判を呼び、モスリンの輸入量が急増し、明治 29 年には 45,466,000 平方ヤードに達したが、此の事を事前に予測し、国産化の準備は整っていたので、この年をピークに輸入量は漸減し、大正期には、輸入モスリンは影をひそめる。

京都工芸繊維大学の前身である京都高等工芸学校が開学したのは日本最初のローラー捺染機始動に遅れること 2 年、明治 33 年（1900）のことである。色染科、図案科、窯業科、機織科等の学生に美術・工芸に関する教育を施すべく、必要な資料・教材を国内・国外から大量購入し、京都工芸繊維大学美術工芸資料館に収蔵した。AN-1137 は 1907 年（明治 40 年）受け入れのモスリン友禅の資料である。資料は合成染料を用いており、47 点の内 1 点は大阪の岡嶋千代造工場で染め、田村駒(株)を通じて販売されたものであることが、ほぼ確認されている。



図-6 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-1137-2 モスリン友禅 ブルーとオレンジのドットの立体感が面白い



図-7 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-1137-12 モスリン友禅

我が国の文様染の系譜は、この頃から二つに分かれる、和装品（着尺 どちらかという小幅物が多い）と洋装品（広幅物）とである。明治期には兼業する染工場が沢山あったと思うが、昭和特に戦後は専門化して、広幅と小幅織物は夫々専門の工場加工するようになった。和装品は絹製品が多く、生産数量は少ないが高度の技術を用いて高級品を生産する。

これに対し、洋装品は綿、合化繊等で数量は大きく、所謂量産品で輸出品の占める割合が大きい。唯商品は別々でも、技術的な変化は同じ経過を辿る。昭和初

期にスクリーン捺染が台頭する。生産能率は悪いが、発色が美しく、多色が使え、文様のピッチを自在に変えることが、出来るのが特色である。昭和3年(1928)母校の田中隆吉先生が、ドイツ留学で得た捺染技術を基礎に、小野木次郎が彼の指導を受けて、実用化の研究を進めたことに始まる。



図-8 京都工芸繊維大学美術工芸
資料館蔵 AN-1137-46
モスリン友禅

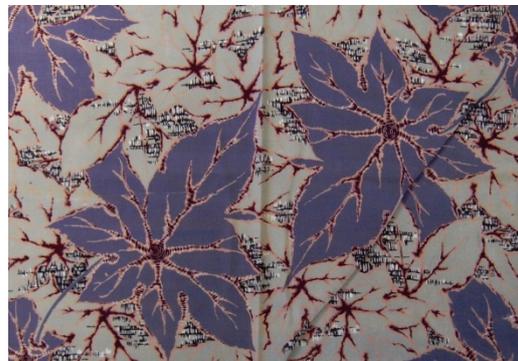


図-9 京都工芸繊維大学美術工芸
資料館蔵 AN-1137-17
モスリン友禅

一方これとは別に、京都市立工業研究所に勤務していた、田中秀人も独自に研究していた。昭和9年(1934)京都の中島友禅が、スクリーン捺染による、友禅を市場に送り出したのを手始めに、横浜、高岡、神戸に波及した☆iv。此の捺染方法を機械化したのがフラット・スクリーン捺染機と走行式スクリーン捺染機である。これ等は間歇運動する捺染機であるが、能率を上げるために回転運動をする、ロータリー・スクリーン捺染機が登場した。此の機械は、ローラー捺染機に代わるものとして、期待されたが、その役割を十分果たしていないのが実情である。20世紀末にはコンピューターの世となり、P.C.の普及と共に、印刷に近いインクジェット・プリンターが普及し、明治末期に遅れ馳せながら産業革命に飛び乗り、ようやく完成した近代工場による集中生産方式が早くも、崩壊し始める。

話を明治にもどす。文様染の原点は法隆寺の三纈に源を発すと先に述べた。三纈は凡て防染による文様の表現であるこの方式では、地色は浸染か引染によって表現するので、深みのある味わい深い色を表現することが出来る。日本人はこの事にとことん拘り、独自の方法により型染め、友禅染、板締め染、絞り染等を完成して、明治の開国を迎えた。ようやく政局も安定し、明治十年を過ぎる頃から衣料の近代化や洋風化に、政府も力点を移すようになり、学者の招聘・交流、留学生の派遣、技術の導入・外人技術者との接触、博覧会などによる洋風生活と商品の紹介等を積極的に行うようになった。先に述べた京都工芸繊維大学の前身京都高等工芸や京都高等蚕糸の設立はその一環である。

衣料の洋風化で先ずしたことは丁髷を切り、所謂散切り頭にする事である。

江戸時代役人は武士の仕事であったので、武士の恰好をしておれば役人と考えればよかったが、明治政府は役人や公務員は一般庶民から採用した。特に軍人、警官、郵便配達人、国鉄乗務員等には、ユニホームを給付しなければならなかった。

そのため大量の綿布、羅紗地を必要とし、その染色が規格通りにならなければ、ユニホームの意味をなさないで、その技術者を養成することが緊急の課題であった。従って此の頃立ち上がった近代染色工場は、こうした仕事を政府から受注することを目的に、設立したものが多かった。当時ヨーロッパにおけるユニホームは黒色が多く、それに使う染料はメキシコ産のログウッドと、その精製品ヘマチンが大勢を占め、染色技術習得のため渡欧した、稲畑等が持ち帰ったのはその量産化技術であった。とは言え、当時の世界的なトピックは合成染料による浸染・捺染であった。

ここで染料の開発史に注目すると、色染料の卒業生なら常識の1856年ウイリアム ヘンリー パーキンによるモーヴ(商品名ティリアン パープル)の発明に始まる。これは絹を美しい紫に染める、塩基性染料であった。1852年にマジエンタが認識されていたが、これが染料として商品化したのは、モーヴに後れること3年1859年の事であった(CI No.677)。1861年ロートがメチール ヴァイオレット前後してサフラニン、ビスマルク ブラウン等が開発された、いずれも塩基性染料である。

此の頃は未だ、偶然に出来た染料が多かったが、当時の化学者の目標は、インドの藍、トルコのアリザリンであった。藍の合成、工業化には長い時間を必要としたが、先ず、1869年クレベ、リーベルマン、カロがアリザリンの合成に成功した。これは人類が長年使いならした天然染料を、意図して合成した最初の人造染料である。1871年クレベとリーベルマンは更にアリザリン ブルー S (CI No1067)を合成し、アリザリン染料が茜色以外の色に発展する可能性を示唆した。

動物性繊維染色を目的とする、酸性染料と酸性媒染染料については、1862年ニコルソンによるソリュブル ブルーの発明を嚆矢とする。1871年にはカロによってエオシン(CI No.768)が作られた。此の頃直鎖アゾ染料の研究が進み、赤、青、黒等の酸性染料や直接染料が次々と発表された☆v。

1881年ケヒリンはガロサイアニンを発見した。これはオキサジン属の媒染染料で、茜根、フスチック、ログウッドのようにクロム媒染で羊毛を染めることができる。1885年メルドラがアリザリン Gを、ニーツキがアリザリン Rを発見した。いずれもクロム媒染で羊毛を染める。

キャリコプリンターにとっての福音は、ナフトール染料の出現である。ベタナフトールのアルカリ性水溶液を綿布にパッド・ドライして、ジアゾ化したベタナフチラミンの液を通すと、堅牢な赤が得られた。発見したのはリード ホリデイで、ホリデイ父子会社を作り、1880年に発売したがそれ程反響はなかった。

1896年になって、ヘキスト社やバディッシュ社がパラレッドその他の名前で売り出したところ、洗濯と日光に堅牢で且つ、アリザリン赤の代わりに使えるこ

とが分かり、大評判になった。1897年バディッシュ社がインジゴ ピュアー BASF を、ヘキスト社が別法によってインジゴ ピュアー MLB を発売した。1901年ヘキスト社は更に改良し、インジゴ ピュアー MLB を経済的に量産することに成功した。これはアドルフ バイヤーが研究に着手してから、35年後のことである。これは長い歴史の中で、人類と深い関わり合いを持つ、二つの染料、藍と茜が人類の手によって作り出された、記念すべき時である。このビッグニュースは当然、我らの母校、旧名京都高等工芸学校色染科にも、教育資料付きで齎されたであろうと思う。

鶴巻鶴一先生寄贈の AN-24,AN-25 はインジゴの布染めと、アリザリンの糸染めの資料である。AN-28はパラレッドと思われる赤地に塩基性染料で調色した、美しいハンカチのサンプルである。

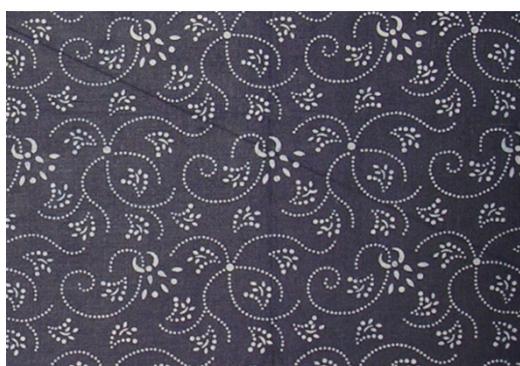


図-10 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-24-48-2 BASF (バディッシュ) インジゴ地染め白色顔料捺染



図-11 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-25-1-06 BASF アリザリンレッドによる先染織物



図-12 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-28-2-06 合成染料によるターキーレッド風ローラー捺染綿スカーフ

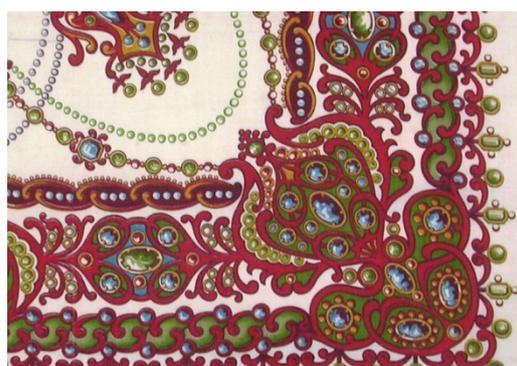


図-13 京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵 AN-28-5-31 塩基性染料によるローラー捺染綿スカーフ

これに続いて酸性染料、塩基性染料、媒染染料、バット染料、硫化染料、酸化染料、ナフトール染料等がドイツ、スイス、イギリス、フランス、アメリカ等で製造され日本はそれを輸入した。繊維関係では絹、綿、羊毛、麻を使用するようになったが、絹麻以外量の高いものは、はすべて輸入に頼らなければならず、パルプから製造する、化学繊維即ち、レーヨンの製造には早くから着手した。このように明治期には、熱源、素材、着色料、加工機が大転換したので、文様染めもそれにつれて変化し、それが 20 世紀前半まで続き、20 世紀後半の、合成繊維の時代へと引き継がれる。

(参考文献)

-
- i 日本機械捺染史 明石厚明編 P-9 (1943)
 - ii 日本機械捺染史 明石厚明編 P-9 (1943)
 - iii 京都近代染色技術発達史 京都市染織試験場 P-40 (平成 2 年)
 - iv 京都近代染色技術発達史 京都市染織試験場 P-181 (平成 2 年)
 - v 絵具染料商工史 大阪絵具染料同業組合
昭和 13 年 1 月 1 日 P-1823 P-1836 P-1832~1834 P-1851

(色染・昭 2 8 萩原理一)